

Title	書を抱えてフィールドに出よう！
Author(s)	柳澤, 沙也子; 小笠原, 理恵
Citation	目で見るWHO. 2024, 89, p. 32-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98291
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

書を抱えてフィールドに出よう!



平和村で働いた ドイツで出会った世界の子どもたち

著者：川村幸輝、勝田茜、溝渕京子、西谷文和、中岡麻記
出版社：あけび書房 2021年9月発行

ドイツ国際平和村は、紛争や貧困に晒され治療を受けられない国に住む子どもをドイツにて預かり、治療を行う人道援助団体です。本書は、医療職をはじめとする平和村で活動経験を持つ日本人4名（うち1名は現在は職員として従事）の声と、ジャーナリストによる取材結果をまとめたものになります。

本書では、著者らが胸を突き動かされて平和村に向かう姿や、平和村での子どもたちやスタッフの日々が生き活きと描かれています。子どもたちは治療やリハビリテーションに励みつつも、起きてから食事、遊び、寝るまで日々を楽しんでおり、世界中どこでも治療を要しても明るく過ごす、子どもたちの順応性の高さが随所に見られました。道端に咲く花に祖国の花畑を重ねる子どもや、子どもの好きな遊びを叶えるためにリハビリテーションを実践するスタッフ、治療を終えた子どもが笑顔で祖国に戻る様子、ひとつひとつの出会いと別れに心が震えまし

た。スタッフが休暇を取ってドイツ国内の病院に入院した子どもに会いに行く姿からは、スタッフと患者の立場を超えた絆を感じました。

ドイツで治療を受ける背景には戦争があり、何の罪もない人々が心身に傷を負っています。治療後に戻る祖国は決して安全ではなくても、子どもたちにとって家族と過ごすことは安心につながります。ルビが振ってあり小学生から読むことができますが、大人の心も揺さぶられます。ぜひ多くの方にご覧いただきたい一冊です。

（紹介者：柳澤 沙也子）



五色のメビウス 「外国人」とともにはたらきともにいきる

著者：信濃毎日新聞社 編
出版社：明石書店 2022年3月発行

少子高齢化や地方の過疎化に歯止めがかからず、外国人労働者の手を借りなければもはや社会が成り立たないのが今の日本です（そしてその状況は今後も加速するばかり）。にもかかわらず、日本ではいまだに外国人住民の人権が日本人と同等に保障されているとは言えません。本書は2021年に信濃毎日新聞紙上に

掲載された同タイトルの連載がもとになっています。取材班が長野県で働く外国人労働者ら取材して聞き取った多くのルポルタージュに加え、県内の監視団体、自治体そして外国人住民を対象に独自で行ったアンケート調査の結果と分析が識者へのインタビューとともに記されており、外国人住民の生活と労働の実態および国や自治体の対応策の問題点が浮き彫りになっています。そして最後には、現状を打破するための「ともに社会をつくるための提言」が示されています。

在留外国人統計上、長野県は在留外国人人数が格段に多い地域というわけではあ

りません。しかし信濃毎日新聞社は、1991年から30年以上にわたって外国人労働者問題取材し続けています。地方新聞は地域社会に大きな影響力を持ち、地域を動かす力があります。タイトルにある「五色」は五大陸つまり「世界」を、メビウスは「メビウスの輪」すなわち表が裏になり裏が表になる「無限大のつながり」を表しています。本書の冒頭で示される編集長の決意に、背中をおされる思いがします。「諦めず、変えていかなきゃいけない」

（紹介者：小笠原 理恵）